

東京都町田市的生活アメニティーに関する考察

目 黒 綾

この卒業論文は、町田市をフィールドに、新興住宅都市として開けた都市の住み易さといったものについて考察しようというものである。

町田市は、単純に住宅都市というのではなく、東京大都市圏の中の有力な生活核である。市外に出る就業者は、昭和55年で、市内に住む就業者の60%を占め、そのほとんどが都心に出ている。そういったことは町田市を大きく特徴づけ、アメニティーにも影響を与えているのではないか。また、多摩丘陵という地形が、物理的に開発を困難にしてはいないか。そして、都心に対して郊外といった地勢が及ぼす気風から生まれたものもあるはずである。

これらを浮き彫りにするために、生活関連施設を調査し、資料を得た。調べた施設は上水道・下水道・福祉施設・図書館・公園・資料館・美術館・市役所である。

結果から考察し得たことは次の様である。

第一に、町田市は北部から東部にかけての一带が多摩丘陵に含まれた起伏に富んだ地形をしている。丘陵地であることが町田市の都市開発に基本的に大きな影響をもたらしてきた。そして町田市の内部でもこの起伏が地域差を生む原因となった。下水道・道路交通はその影響を多分に受け、起伏のため開発の遅れた地域のアメニティーは当然低くなっている。しかしながら丘陵地であることが悪影響を及ぼしているだけなのではない。丘陵地であるということは同時にもともとは緑が豊富なことである。このことは町田市全体のアメニティーを高めている。

第二に、町田市域が神奈川県と境を接していることは、町田市を東京都の縁辺部の市として性格づけている。町田駅を中心とした商業核では、デパートなどのお客への集客用PRも神奈川に向けて行っている場合が多い。つまり、町田商業核というのは神奈川に向けて大きく開かれており、この商業核に到来する人々は、JR横浜線を利用してやってくる八王子市民や近隣の多摩市民、稲城市民（以上全て東京都民）よりも、座間・厚木・新百合ヶ丘といった小田急沿線の神奈川県民が多い。そのような都市の性格をもっている。

第三には歴史的気風があげられる。町田市は自由民権運動の盛んな地であった。それが根底に流れていると思われるものに、多摩は23区とは違った独自の地方自治体を目指し、緑保全を重視した町づくりという考えがうまれたということがある。

最後に、交通の結節点ということも、町田市の性格として挙げられる。道路交通と電車による交通それぞれに結節点があり、特に道路交通に関しては歴史的にも古い。人の行き来が情報を運び、大きく開けることとなった。

この論文を書いていくうちに、今まで私が町田市に対して抱いていたイメージは崩れ、一つの都市が集落から発生・発展していく過程が明らかになっていったように思う。低次の機構が高次になるとともに都市は都市としての機能を備え、やがて周辺地域に影響を与えるようになる。その中で一番重要な存在なのはやはり人間である。人間が住み易いと感じられる都市であるかどうかということはこの卒論で追求したつもりである。